

長崎カトリック教会群とツーリズム

山 中 弘

(1) はじめに

長崎県各地に点在するカトリック教会群を訪れて実感するのは、それらが位置する場所の辺鄙さである。長崎市や佐世保市といった大きな都市部にある教会は別にして、その多くが交通の便の悪い離島や坂道をしばらく歩かなければならない高台に位置している。いわば人里離れたところでひっそりと佇んでいるという感じだ。ところが、最近になって、教会のこうした落ち着いた佇まいが変わり始めている。狭い道路いっばいに大型の観光バスが通り始め、ひっそりとしていた教会の周辺に観光客の姿がにわか目につくようになってきた。教会のなかには一部の建物を移転させて、より広い駐車スペースを確保するところも出てきている。こうした劇的ともいえる環境の変化は、平成19年1月に「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が世界遺産推薦の国内暫定リストに追加掲載されたことに由来するといっている。これによって、長崎県下の自治体が教会群を中核とした宗教的資源の観光化を本格化させたからである。長崎教会群の観光化の進展は、私がこのところ関心をもっている「宗教とツーリズム」というテーマを考えるうえで興味深い事例を提供してくれているように思われる。そこで本稿ではまず、長崎県が取り組む「ながさき巡礼」という宗教と観光を一体化させた新たな企画に注目するとともに、質問紙による調査にもとづいて、教会を訪れる観光客の社会的属性や意識について紹介する。次いで、この観光化のプロセスを、社会学者ディーン・マッカネルの「サイトの聖化」という概念を援用しながら¹⁾、「メーカー」と「ユーザー」という言葉を使って簡単な図式化を試み、あわせて教会群を観光サイトとして表象する支配的な言説がいかなるものなのかを明らかにする。最後に、カクレキリシタンの集落である平戸市根獅子町を取り上げて、観光の支配的言説に対して、彼らが観光の場においてどのように殉教という自らの集合的記憶を表象する戦略を採用し、それらを自分たち固有の観光資源に転換しようとしているのかを検討したいと考えている。

(2) 教会群の観光資源化の展開

長崎県がカトリック教会群を観光資源として活用し始めたのは、教会群の暫定リスト入り以前からである。すでに平成15年に平戸観光協会が平戸の教会群めぐりを中心とした観光商品「長崎キリシタン紀行」を発売している。しかし、長崎県観光連盟がこの時点で教会めぐりにとくに絞り込んだ観光戦略を考えていたようには思えない。むしろ、県の学芸文化課とタイアップしながら、キリシタンだけでなく長崎奉行所など長崎固有の歴史的出来事を発掘して観光の資源にしようとする「ながさき歴史発見・発信プロジェクト」の一環として、「キリシタン文化」というアイテムも存在していたとみた方が正確のように思

われる。このプロジェクトは、平成17年に開館した長崎歴史文化博物館を契機にして、長崎固有の歴史的な事蹟を発見し、それを長崎の新たな歴史ブランドに育て上げようとする試みで、その一つとして既に長崎のキリシタン文化も取り上げられており、その具体的成果は長崎文献社から刊行された小冊子『旅する長崎学 キリシタン文化』として結実しつつあった。しかし、平成17年当時の観光連盟での私の聞き取りから判断して、この時点では県下に点在する数多くのカトリック教会群を県の観光の目玉として育てようという問題意識はそれほど強くなく、まして教会群を世界遺産にしようという意図も希薄だったように思われる。むしろ、教会群の世界遺産化の推進は、県の観光戦略とは別に、主に離島部に存在する教会群の保存といった目的のもとに、平成13年に立ち上げられた民間の「長崎の教会群を世界遺産にする会」（「世界遺産の会」と略）が独自に進めていたものであり、当初、県側の態度は、この会の運動に対して少し距離をとっていたように思われる。しかし、平成18年度から世界遺産の国内候補の選定が都道府県と市町村の共同推薦という方式に変わり、各自治体がそれぞれの文化・自然資源を世界遺産指定につなげる具体的な道が開かれたことで、自治体の世界遺産指定への取り組みが変化してくる。長崎の場合、先行する「世界遺産の会」の地道な活動の蓄積を背景にして、平成19年1月末に「長崎教会群とキリスト教関連遺産」の暫定リスト追加掲載を勝ち取り、世界遺産指定がにわかに現実味を帯びてきたのである。こうして、長崎県は教会群を利用した観光戦略に本格的に着手し始めることになったが、県全体としての具体的な一歩が「ながさき巡礼」という興味深いコンセプトの提案である。この企画提案書である「新しい文化の創造 “ながさき巡礼”の創設に向けて」を読んでみると、次のような興味深い文章がある。少し長いが引用してみよう。

「従って、各地の教会群のネットワークによる長崎巡礼を創設した場合、当然のことながらキリスト教徒の皆さんの参加が想定されます。

しかし、長崎巡礼は、信者の皆さんだけのものではありません。建築物としての価値も非常に高い“本物”の空間の中で様々な話を聞いたり、地域の歴史・文化や人々とふれあったりしながら、これまでの人生を振り返り今後の生き方を考える、また、様々な安らぎや癒しを味わうことの出来る新しい文化です。

“ながさき巡礼”が浸透し、多くの地域の人々に関わることにより、地域の歴史文化の継承や創造へと波及し、ひいては、長崎県全体の歴史文化の発展に貢献します。

こうした“本物”の“ながさき巡礼”を創設するためには、各地域の教会だけではなく、長崎大司教区との連携はもとより、地域住民の参加、巡礼者との連携・協力体制を構築することが重要となります。」²⁾

ここでは、この巡礼が「信徒の皆さんだけのものではありません」と明確に述べて、それがこれまでのカトリック巡礼とは異なっていることが確認されている。そのうえで、巡礼が、信仰をもたない一般の人びとに対して、「建築物としての価値も非常に高い“本物”の空間の中で」、「これまでの人生を振り返り今後の生き方を考える」機会を提供するとともに、「様々な安らぎと癒し」を与えるとしているのである。長崎大司教区の指導のもとに選定された信徒だけに閉じられていない巡礼、これはかなり斬新なコンセプトといえよ

う。だが、同時になかなか難しい試みでもあろう。大司教区が選定する巡礼地はカトリックの側からすれば、当然にも信仰というコンテキストからおこなわれるが、選定された巡礼地が観光のコンテキストのなかでも利用される以上、二つのコンテキストの重なりは微妙な問題を生む可能性をもつかもしいない。

当然のことながら、教会群をめぐって自分の人生を考えたり癒しを与えられたりすることだけが「ながさき巡礼」の目的ではない。そのさらに大きな目的は、教会、地域住民、行政、旅行者、信徒などの連携を通じて教会を核とした「面的なネットワーク」を構築し、それぞれの地域の活性化を図ろうということにある。こうした発想には、明らかに四国八十八カ所の札所をめぐる遍路を連想させるものがある。四国遍路では、札所となっている各地の仏教寺院をめぐるお遍路さんと「お接待」などを通じて彼らを支える地域住民がおり、それらが一体となって地域振興にも結果として貢献することになっている。実際、企画書には「ながさき巡礼」がめざす他地域モデルとして四国が挙げられており⁴³⁾、この新たな巡礼が四国八十八カ所巡礼のキリスト教版を念頭においていることがわかる。しかし、長い時間をかけて日本の宗教文化にしみ込んでいる弘法大師や仏教に比べて、キリスト教は日本人にとっていまでもなおあまり馴染みのない異質な宗教空間である。確かに、長崎では地域によってカトリックが地域文化の一部になっているところもあるが、全般的にみれば四国のような状況とはとてもいえないだろう。その意味で、長崎県が県をあげて取り組みはじめた「ながさき巡礼」というコンセプトの成否は、今後大いに注目されるように思われる。県観光連盟は、高速道路交流推進財団から補助金3000万円を獲得し、3年計画でこの新たな巡礼創出に取り組んでおり、最初のモニター・ツアーが本年9月に実施されている。

県下のいくつかの自治体も、既に教会群を資源とした観光的取り組みを行なっている。先にも触れたように、平戸市は教会群の暫定リスト入り以前から市内の教会群をめぐる観光商品「キリシタン紀行」を発売している。これは、聖フランシスコ・ザビエル記念教会、宝亀教会、田平教会など市内に点在する教会、殉教地を徒歩やタクシーを使って見て回る少人数ツアーである。この商品の開発の背景やその過程については松井圭介の論文に詳しいが⁴⁴⁾、「平戸が誇ることのできるオンリーワンの観光資源は何か」ということで目をつけたのが教会群であったという。当初は、土、日に、10名を定員としたガイド付きのマイクロバスでキリシタンゆかりの場所を半日ないし1泊2日でまわるというものであったが、現在では時間別の二つの徒歩コースと、料金別の3つのタクシーコースが主力となっている。2004年の「キリシタン紀行」の実績は一年間でわずか247名とあまり振るわなかったが、世界遺産暫定リスト入り以降、平戸観光協会の担当者からは、この商品への反応は上々だという。

新上五島町は、教会群の観光資源化にもっとも積極的に取り組んでいる自治体であろう。世界遺産のイメージを最大限に利用した観光振興ビジョンを策定しており、観光戦略の全体的テーマとして、「世界遺産に会える島」を謳っている。隣接する五島市が飛行機でのアクセスに恵まれ、五島城址と武家屋敷、真言宗の名刹明星院、2000人以上が参加し今年で21回を数える「五島列島ゆうやけマラソン」など、教会群以外の観光資源に相対的に恵まれているのに対して、豊かな自然を除いてこれといった観光資源のなかった新上五島町では、まさに教会群の世界遺産化は願ってもない観光の目玉の出現ということで、

町内の国指定重要文化財である二つの教会を前面に打ち出して、観光客の誘致に余念がない。その代表的なイベントが今年で2回目を迎えた「上五島教会めぐりウォーク&クルーズ」であろう。これは、健康のためのウォーキングを兼ねて、教会めぐりを徒歩でおこなうとともに、海上からもそれを楽しもうという企画であり、第1回目に比べて島外の参加者が格段に増えている。シーズンオフの冬場でも、イルミネーションを施した教会堂でのクリスマス・コンサートをこなっており、平成18年の青砂ヶ浦教会でのコンサートでは約200名ほどの参加者があり、平成14年から始まったチャーチ・コンサートの一環として着実に広がりをみせている。

これら自治体の取り組みに対して、当のカトリック教会の動きはどのようなものだろうか。その対応は、地域や司祭によってかなりの温度差があるが、全体を統括する長崎大司教区のレベルでは、高見大司教の「開かれたカトリック」という方針のもとに、観光を含めて教会を信徒以外の人々に開いていこうというスタンスをとっており、世界遺産化の問題にも前向きに取り組んできている。しかし、現実の具体的な対応は、観光客が訪れることに全般的に消極的な各地域の教会の司祭の判断に任せざるをえない場合が多く、大司教区全体として特別なことを積極的に行なっていたとはいえない。しかし、県側の教会群の世界遺産暫定リスト入りに向けた準備を背景にして、平成18年7月から県観光推進本部と大司教区との会議が定期的に行なわれるようになり、翌年5月、長崎巡礼センターが設立された。このセンターの事業計画は、(1)「長崎巡礼に関する情報発信事業」、(2)「長崎巡礼の現地案内事業」、(3)「カトリック長崎大司教主催「長崎巡礼」の企画、実施」、(4)「巡礼グッズ及びブックの企画・制作・販売」、(5)「その他、長崎巡礼に伴う必要な事業」となっている⁵⁾。このセンターは、各自治体が進める教会群の観光資源化の取り組みによって生じる様々な問題を処理する大司教区の出先機関であり、いわば観光事業と地域の諸教会とを仲介する教会側の正式な窓口といえよう。センターの設置は、カトリック側による教会の観光化をチェックするための制度的整備の実施ともいえるが、全体的にみれば、県側が大司教区をようやく観光の場との接点に連れ出すことに成功し、大司教区との協働の実を得る体制を築いたとみるべきだと思われる。

長崎大司教区の態勢が徐々に整ってきたのに対して、各地域のカトリック教会の対応はかなりのばらつきがあるようである。世界遺産の動きにもっとも敏感に反応している新上五島町では青方のカトリック・センターを中心にして、司祭たちも熱心にこの取り組みをサポートしているようであり、敬虔なカトリック信徒がガイドを務める教会めぐりも好評を博している。しかし、隣の自治体である五島市では司祭の間にも意見の違いがあり、教会をイルミネーションで飾ることも、新上五島町ほどスムーズにはいっていないようである。そもそも、福江港のターミナルにある五島市観光協会のブースでは、島内八十八カ所の遍路装束が販売されており、観光ポスターのデザインも教会群を特別にクローズアップしておらず、町内のカトリック教会群を前面に押し出したポスターを制作した新上五島町とは好対照をなしている。数年前に、筆者が聞き取りをした観光協会の事務局長(当時)は、福江島ではキリスト教と仏教とのバランスを取ることが求められて苦勞すると語っていたが、五島市の教会群の観光化の取り組みの遅れは、キリシタン弾圧という長い歴史に由来する市内の複雑な宗教状況が反映しているようにも思われる。

(3) 観光客の反応

次に、教会群を訪れている人々はどのような人々で、彼らは教会堂にどのような印象をもったのかについて簡単にみてみよう。教会群を訪れる人びとは大きく二つに区分できるように思われる。第一番目のグループは主に長崎やそれ以外の地域からやって来たカトリック信徒の巡礼団ないし巡礼者である。巡礼団といっても大規模なものではなく、神父が少人数の信徒たちを引率するものもあれば、一人だけで教会をめぐる人もいる。また、日本ばかりでなく、海外とくに韓国からの巡礼団が目立っている。こうした人びとは一般的な意味では観光客とはいえないものの、長崎の教会群の多くがカトリック教会の指定した公的な巡礼地ではなく、その巡礼も、巡礼専門の旅行者や一般の旅行者のセールスを媒介することが多いことを考えれば、彼らをいわゆる「宗教的観光客」(religious tourists)と呼ぶことも可能だろう。もう一つのグループは、いうまでもなく信仰以外の目的で教会を訪れた一般観光客である。しかし、現実にはこれら二つのグループの区別は厳密には難しく、特に後者の場合には、信仰上の理由をもちながらも一般観光客として訪れるということも数多くあり、こうした区別はあくまでも便宜的なものにすぎない。しかし、信仰であれ、観光であれ、それぞれの地域に住む住民だけの祈りの場だった教会堂が、世界遺産化への動きの中で地域を越えた様々な人々のまなざしに触れることになったという事実は、これらの教会群の広い意味での観光化に他ならず、そこを訪れる人びとすべてを観光客とみなしても差し支えないように思われる。この二つのグループうち、どちらが多いのかについて確認する術はないが、教会に置かれている感想を記したノートには、カトリックの巡礼者たちのものが数多く残っており、これだけで判断すれば現時点では巡礼団の人々が多いような印象をもつ。ノートには名前と住所のみを記したものがほとんどで、彼らの詳しい社会的属性を知ることはできない。ただ、次に紹介する二つのもののように、時折記されている感想からその心情を伺い知ることはできる。

「北海道から巡礼旅行の都度寄らせていただきました。皆様が聖堂内を美しく飾っているのを見せていただき、感謝いたします。」

「とても心安らぐ教会です。今日から祈りの巡礼です。病気で落ち込む私を主はともに居らせてくださり、歩み、導いて下さっています。多くの出逢いに導き、支えられています。教会と信仰は、私の心の安らぎ、よりどころになっております。ありがとうございます。」

もう一つのグループである一般の観光客についてはどうだろうか。旅行社の観光パックを利用したものであれ、個人旅行であれ、彼らの社会的属性や意識を知る手がかりとなる十分な資料を手に入れることは難しい。そもそも全体としてどのぐらいに人々が教会群を訪れているのかについて公的な統計も存在しない。ただ、わずかだが部分的な資料がないわけではなく、例えば世界遺産の暫定リスト入り以前の平成17年度に新上五島町にある重要文化財の二つの教会を訪れた観光客数はあわせて6629名と報告されている。この数字は、離島という不利な条件を考慮すれば決して少ないとはいえないように思われ、そこか

ら推測しても、全体として、この種の観光サイトとしてはそれなりの数の観光客を引きつけ始めているのではないと思われる。われわれは幸いにも、昨年、本年と二年間、新上五島町の観光物産課の協力で町が主催する「上五島教会めぐりウォーク&クルーズ」において同一の質問紙を参加者に配布することができた。昨年のこのイベントと今年のを比べてみると、広報活動、コースの選定、ボランティア体制などで格段に改善されており、参加者も132名と増え、島内以外の参加者も78名に及んでいる。しかし、イベントの内容自体に大きな変更はなく、集計の結果からも両者に著しい差異を認められなかったので、そこから共通して読み取れる彼らの年齢層、社会的属性、動機などを紹介してみよう。性別で見ると、男女の比率は女性の方が多いが、男女比は際だって大きいわけではない。年齢では50歳以上が大多数であるが、本年は30歳代から40歳代の年齢層がやや増えている(図1)。職業別では主婦、会社員、公務員、定年退職者など、時間に比較的余裕がある人々で(図2)、宗教的にはほとんどカトリック信徒ではない(図3)。彼らがこのイベントに参加した理由としては、教会建築への興味、クルージング、ウォーキングへの興味が多く、本年からは暫定リスト入りした影響で世界遺産への関心という理由を挙げる人び

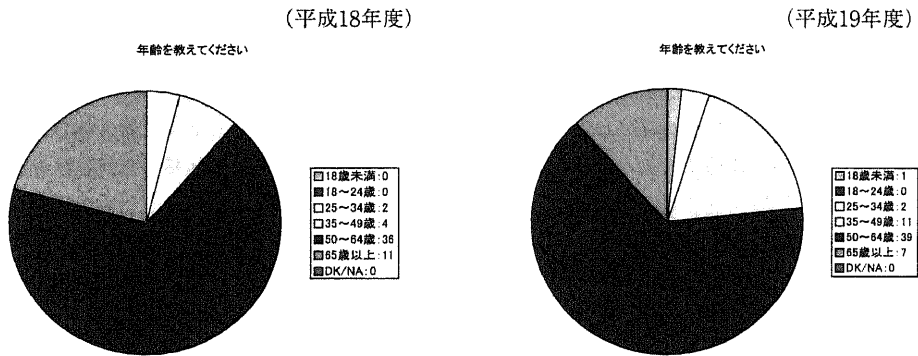


図1 参加者の年齢

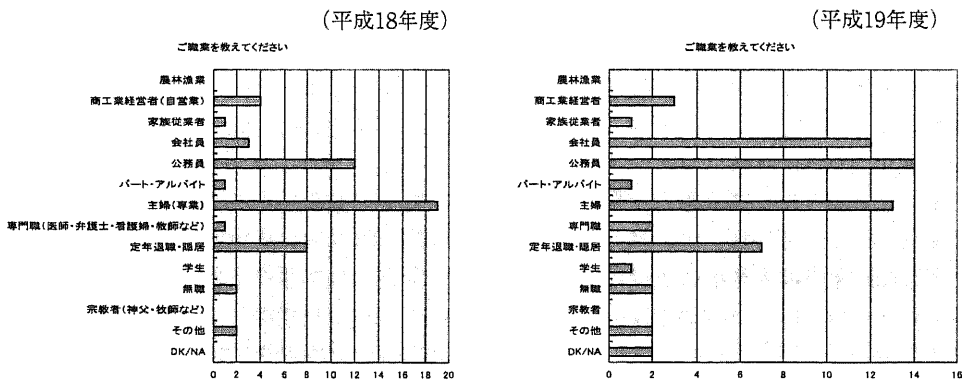


図2 参加者の職業

とも出てきている(図4)。教会めぐりへの関心については、地域や信仰の歴史、教会建築への興味などが多く、全体として宗教文化への教養的関心とその動機となっていることがわかる(図5)。また、教会に対する印象も一貫して非常に肯定的であることがわかる(図6)。

こうした数字だけで参加者について何か一般的な傾向を論ずるのは無理なことだが、年齢的には中高年齢層で比較的時間に余裕があり、宗教文化や歴史に教養的に興味をもち、さらに自然や健康にも関心をもっているといった共通項を指摘できるかもしれない。こうした推測は、平成18年10月、世界遺産の会が主催した「平戸の教会群の価値を共有しませんか」(32名)と銘打たれた教会群の見学会・講演会に際して同じ質問紙を使った参加者の意識調査の結果からもある程度裏づけられる。このイベントの趣旨は、教会群の暫定リスト入りに向けて教会群の価値をアピールするためのものであって、観光的なイベントではなかった。参加者の年齢層は、上五島のイベントと同様に50歳以上を中心としているものの、30代後半以降の人もおり、このイベントが定年者層を中心とした単なる余暇活動とは異なっていることをうかがわせる。(図7)。半数が他県からの参加者となって

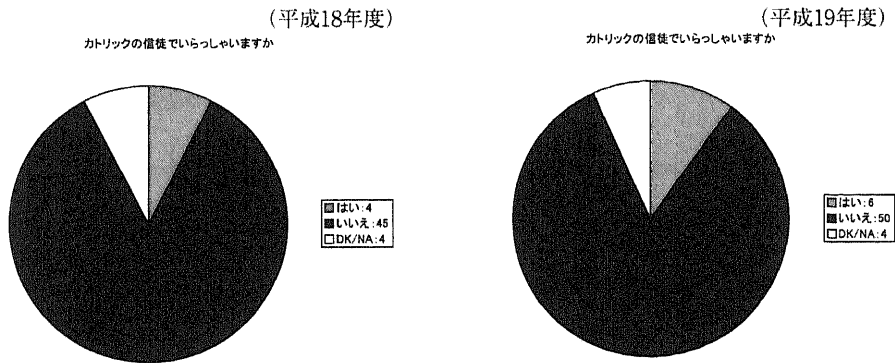


図3 カトリック信徒の有無

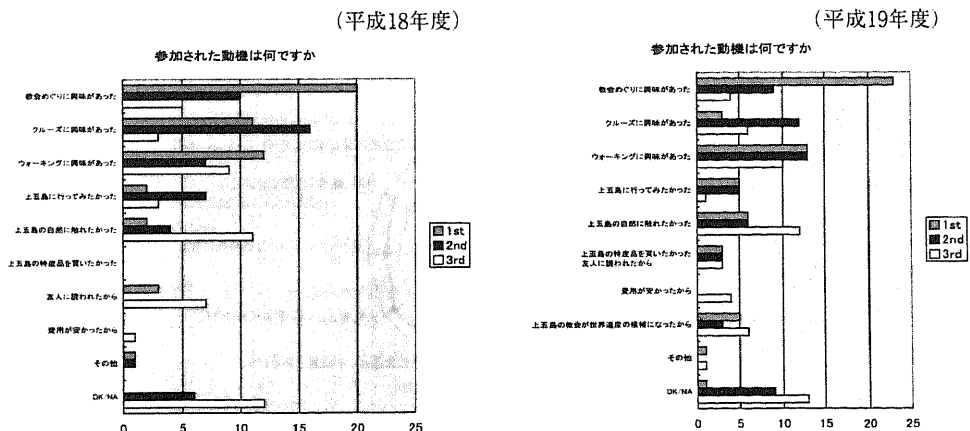


図4 参加者の動機

(平成18年度)

(平成19年度)

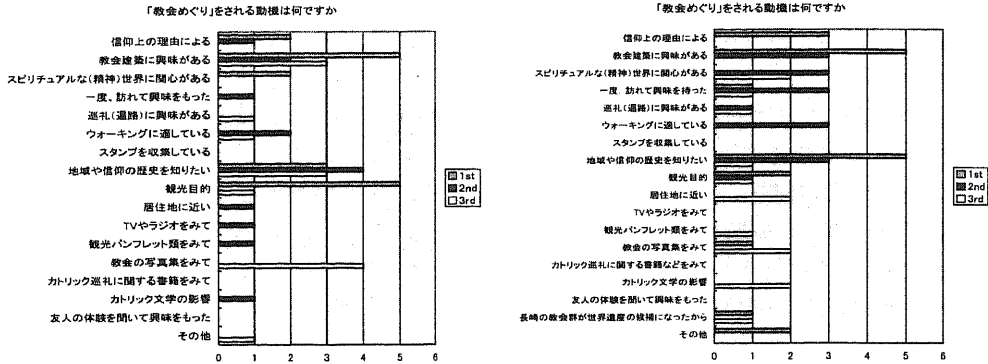
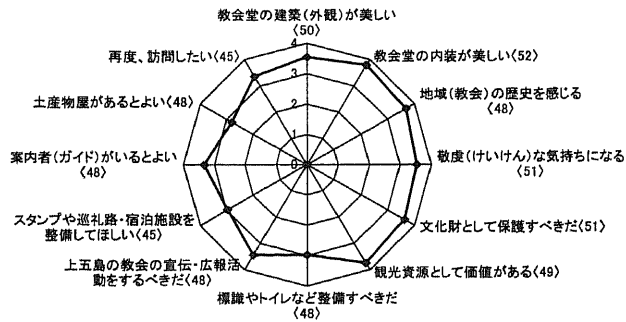


図5 教会めぐりの動機

上五島の教会についてどのような印象を受けましたか

(平成18年度)



上五島の教会についてどのような印象を受けましたか

(平成19年度)

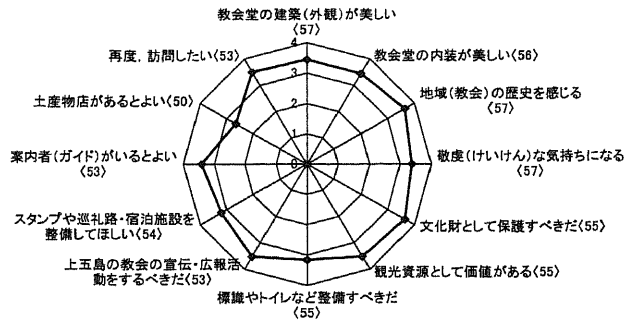


図6 教会の印象

いる。これは参加者の3割弱がカトリック信徒であることやイベントの広報の仕方とも関係するが、教会群という宗教的資源がローカルなものに留まらない魅力を秘めているためとも解釈できよう。参加者の職業は主婦や定年退職者などが多いが、専門職に就いている人びとの参加も目立っている(図8)。これは、このイベントが教会群の建築の鑑賞という限定的な性格をもっていたことに関係しているように思われる。参加の理由として教会建築や教会めぐりを挙げる人びとがほとんどであるが(図9)、教会めぐりの動機として、教会建築とともにスピリチュアルなものへの関心なども挙げられている(図10)。このイベントの性格が新上五島町のものと異なることを考慮すれば、こうした結果が先の参加者の属性や関心の一般的傾向と重なる部分が多いことは、既に指摘した観光客の特徴の妥当性を示唆しているように思われる。

次に、もう少し具体的に、こうしたイベントに参加した人びとがそこで何を感じていたのかを、彼ら自身が書いたものから少し拾ってみよう。まず、新上五島町のイベントの質問紙の自由記述欄に記された参加者の感想を二つほど紹介してみよう。福岡から来たとい

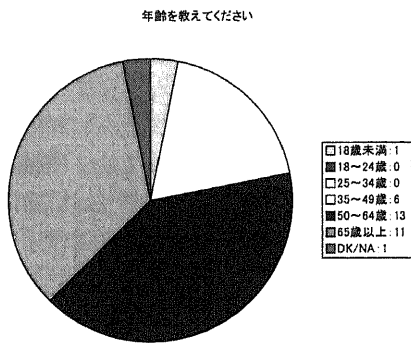


図7 参加者の年齢

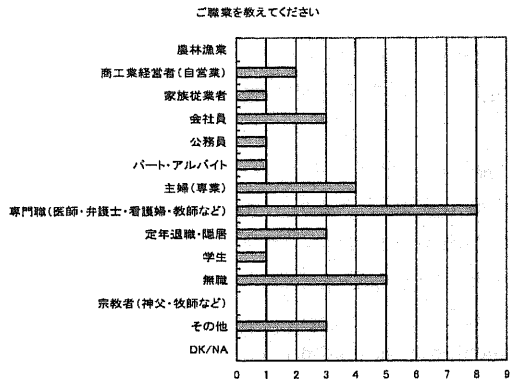


図8 参加者の職業

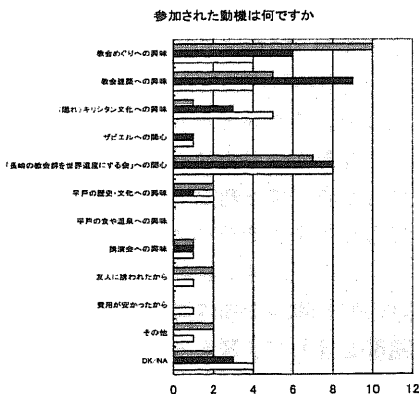


図9 参加の動機

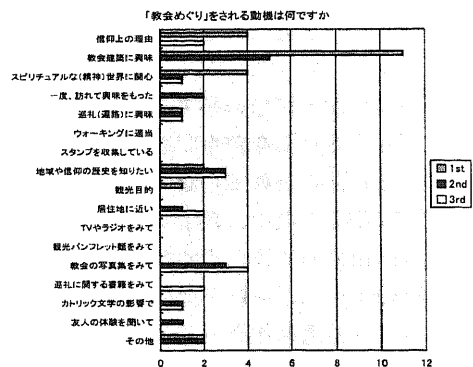


図10 教会めぐりの動機

うある年配の男性はこう書いている。

「私は信者ではありませんが、教会をめぐってとても気持ちが安らかになり、教会の建物もすばらしく目のほようになりました。それにウォーキングをかねてまんぞくです。」

同じく福岡からの年配の主婦はこう書いている。

「一番感動したのはキリシタン洞窟です。信仰の強さに胸が熱くなりました。一生の思い出になるでしょう。五島にこんな美しい教会がいっぱいあることを知りませんでした。海もあんなに美しいとは思ってもみませんでした。」

これらごく限られたイベント参加者たちの質問紙の記述以外にも、教会堂の感想ノートに記された短い言葉には、教会を訪れている人々がそこで何を感じたのかを推測する手がかりが残されている。以下、教会に立ち寄った非信徒とおぼしき4人ほどの感想を列記してみよう。

「上五島にきて心身ともにいやされました。こんな気持ちいい日は久しぶりな気がします。教会めぐりをまだまだ続けたいと思っています。」

「福岡から来ました。地元ですが、なかなか中までは見れないので感動しました。五島に初めて来たのですが、自然に囲まれて、とても気持ちの良い気分で、一日一日をすごすことができています。自分も常に自然体という姿勢を忘れずに生きていこうと思います。アリガトウございました。」

「東京での長いサラリーマン生活を終え、今旅に出ています。転勤属^{マツ}だったので各地を巡っています。五島は初めてで、素朴で観光地化されていない信仰の島がとても気に入りました。この教会は五島で五番目です。」

「東京からまいりました。心が休まりました。自分のことだけでなく周りの人が楽しく生きていくことを考えて今の自分を見つめ直したいと思います。」

これらの記述には、必ずしも教会堂だけにとどまらない、それらと一体になった五島の自然が与える癒しなども記されており、教会堂に向かう意識がキリシタンの信仰や建築学的美などに限定されていないことがわかる。また、彼らがキリスト教とといった特定の宗教を意識することなく、教会堂の宗教的雰囲気の中で自らの生き方を見つめ直していることは注目に値するように思われる。

以上のように、これまでの地元カトリック信徒だけのローカルな祈りの空間であった教会堂は、世界遺産化を背景とした教会群の観光化の進展を通じて、脱ローカルな極めて多様な「観光のまなざし」の中へと明らかに定位され始めているといえるだろう。

(4) 観光的表象の「枠づけ」と支配的ナラティブ

さて、このように地元で「埋め込まれていた」天主堂が様々な人々の観光のまなざしの中に捉えられるようになっていく過程は、祈りの場としての教会堂がそのまま観光地化したという意味ではない。もちろん、本稿の冒頭で述べたように、教会堂やその周辺は急速に変貌を遂げている。しかし、私の観点からすれば、それは何よりも教会群が特定の「枠づけ」を通じて「観光的表象」へと転換されたと捉えられるのであり、そこに私の問題意識もある。この「観光的表象化」とは、天主堂に込められた地元の人々の信仰的思いを新たな観点から「枠づけ」、観光の文脈へと「高める」という作業ということができる。D・マッカネルは、ある場所が特別な観光的スポットになる過程に注目し、それを「サイトの聖化」(sight sacralization)と呼んでいる。彼のいう「サイトの聖化」とは、観光サイトが決して所与のものではなく、特定の段階を踏んでサイトとして社会的に構築されるということを意味している。彼によれば、そのプロセスは次の5段階に区別されるという⁽⁶⁾。第1段階は「名づけ局面」(the naming phase)と呼ばれ、ある光景が類似した対象から見るに値するものとして区別されるという段階である。第2段階は、「枠づけと上昇の局面」(the framing and elevation phase)で、枠づけには、保護(protecting)と高めること(enhancing)という二種類があるとされる。3番目は「安置段階」(the enshrinement stage)である。その例として、聖遺物を収納する教会や博物館での貴重品の展示の仕方などが挙げられている。第4段階は「機械的複製段階」(mechanical reproduction stage)で、その場所などが印刷、写真、彫像などを通じて複製されるということである。そして、最後の段階は「社会的複製段階」(social reproduction stage)と呼ばれ、そうした場所が社会的にも広く認知され、その名前を冠した町や地域などが誕生することである。もっとも、この「サイトの聖化」の5つの段階の内容は曖昧な点もあり、それぞれの段階をそれほど厳密には区別できないようにも思われる。むしろ、これらの諸段階を、サイトとして外在的な社会的実在となるプロセスとして捉えれば、複製という行為が伴うかどうかを境に大きく二つに区別してもいいように思う。いずれにせよ、マッカネルが主張するのは、観光に値する場所とはそれ自体のもつ固有の魅力に由来するよりも、社会的プロセスを経るなかで観光サイトとして構築されるのだということである。彼は、「サイトの聖化」のプロセスの最初に位置する「名づけ局面」の具体的事例として、国立公園への指定が議会において決定されることを引き合いに出しているが、ある対象がサイトと指定されるのは、対象そのものがもつ審美的力ではなく、社会がそれをサイトの地位へと引き上げるからだというのである。そして、これら一連のプロセスの出発点に存在しており、マッカネルがつねに注目するのが「マーカー」という概念である。マーカーとは、特定のサイトに関するあらゆる情報(ガイドブック、情報誌、旅行談、スライドショーなど)を意味している。彼が注目するのは、マーカーとサイトとの関係であり、彼によれば、観光客が最初に接触するのは、サイト自体ではなくサイトを表す何か、つまりマーカーであるという。したがって、観光客が観光対象を認識するプロセスにおいて、彼らが実際の観光サイトを認識する前に、そのサイトを表現している写真やガイドブックというマーカーを参照しており、たとえ、そのサイトが眼前にあったとしても、マーカーを参照することで事後的に当のサイトそのものを確認することさえあるとしている⁽⁷⁾。

マッカネルのこうした議論を念頭において、長崎の教会群の観光化の展開を少し考えてみよう。まず、確認しなければならないことは、長崎県下のカトリック教会群は大浦天主堂、被爆した浦上天主堂などを除いて、これまで観光サイトではなかったということである。とくに、黒島、五島など離島部分に位置する教会群は、それぞれの地域の信徒たちの篤い信仰の中心地であったとしても、観光とは無縁なところにあった。ところが、世界遺産化の動きを睨んだ県の観光戦略の練り直しの中で、教会群はにわかに観光のサイトとして脚光を浴びることになったのである。つまり、教会群そのものに当初から観光に値する固有の魅力が備わっていたわけではなく、世界遺産化や観光戦略の再編などというそれを取り囲む社会的プロセスの変化のなかで、それらが観光サイトの地位へと引き上げられたわけである。換言すれば、教会群の観光化とは、教会群が、観光の場の中で様々な観光的表象を纏った観光的構築物へと作り上げられていく過程として理解することができるわけである。したがって、マッカネル的視点からすれば、教会群の観光化の展開とは、それぞれの地域の中で信仰的な意味づけのみを与えられてきた教会群が、観光の場の中で「癒しや安らぎ」を体感出来る場所」といった新たな意味づけによって観光的表象として「粹づけ」されるプロセスに他ならず、そして、恐らくその最大のマーカーが「世界遺産暫定リスト入り」ということになるように思われる。

教会群の観光化を以上のように理解することができるとすれば、観光の場において教会群を観光的構築物へと仕立て上げるアクターたちの存在はきわめて重要なものといわなければならない。観光人類学を援用すれば、観光を論じる基本的な単位として「ホスト」と「ゲスト」を媒介するミドルマンの役割ということになるかもしれない。ミドルマンといえは、観光の現場において遠来からの観光客たちに地元の文化を解説したり通訳したりする観光ガイドやホテルのマネージャーなどが想定されようが、もう少しマクロなレベルから教会群の観光的表象への転換を論じようとする本稿の視点からすれば、ミドルマンよりも、プロデューサーという言葉の方がより適切かもしれない。松井圭介は、観光社会学の遠藤秀樹の枠組みを援用して、長崎の教会群の世界遺産暫定リスト入りに大きな貢献をした「世界遺産の会」を論じるなかで、次のような図式を提示して、教会群の観光化においてプロデューサーの役割の重要性を示唆している⁽⁸⁾ (図11)。しかし、松井のこの概念図は教会群の世界遺産化に関わるいくつかの動きを整理する上で非常に有益といえるが、実際の観光の現場では、彼がプロデューサーとして括った様々なアクターたち（行政（地

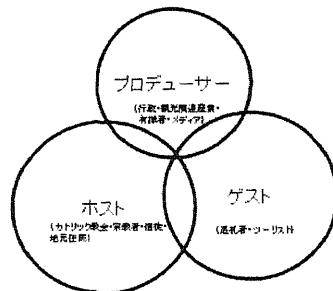


図11 観光の場における主要アクターの概念図

方自治体)、観光関連業者、有識者、NPO、メディア、教育関係者など)は種々の利害や思惑の中で競合的に動くこともあり、そうしたアクターたちのダイナミズムを捉えようとする場合に、先の松井の図式は少し静態的のように感じられる。私は、サイトを観光的表象へと構築する過程において、そこに含まれている多様なアクターたちの表象化作業の競合や協調といったダイナミズムの一端を焦点化しようとするならば、プロデューサーという言葉よりも、むしろ観光的表象を作り出すという意味で「メーカー」という言葉を使った方がわかりやすいように思われる。そして、そうした場所を訪れる観光客は、メーカーの作った観光的表象を消費するという意味でユーザーと呼んでいいだろう。こうした関係を概念図で描いたものが図12である。左側の円は天主堂や殉教地などの宗教的資源を表現している。それに重なりながら描かれている右隣の円は、この宗教的資源を観光的表象へと加工するメーカーということになる。メーカーは観光ガイド、自治体の観光協会、旅行会社、カトリック教会など様々なアクターたちを含んでおり、それらが相互に協力、競合しつつ、宗教的資源の「枠づけ」を通じて観光的表象を作り上げる。そして、観光客というユーザーは、それらを観光の場において消費するというわけである。

こうした概念図を念頭において、メーカー内部におけるアクターたちの協力、競合という点に注目するとすれば、議論の焦点は、メーカーを示す円を左から右に貫いている大きな矢印、つまり観光的表象を作り出す「枠づけ」をめぐって存在していることがわかるだろう。ここで、私が「枠づけ」と呼んでいるのは、既に紹介したマッカネルの「サイトの聖化」という概念とほぼ同じものであり、ごく一般的にいえば、観光サイトをそれ以外のものから区別して際立たせる行為といえる。物理的にはそれらの周りに柵を設けたり立て札を立てたりすることも含まれるが、そうした行為の中でも特に重要なものは、当該サイトが訪れるに値するものであることを示すサイトへの価値づけである。長崎の教会群の場合でいえば、それらが、誰でも知っており普段は特に注意を払ったことのなかったキリスト教の一般の教会堂とは違って、信仰をもたない一般の人々でも訪れるに値することを示すということである。つまり、ここで私がいう「枠づけ」とは、教会群を意味づけ価値づ

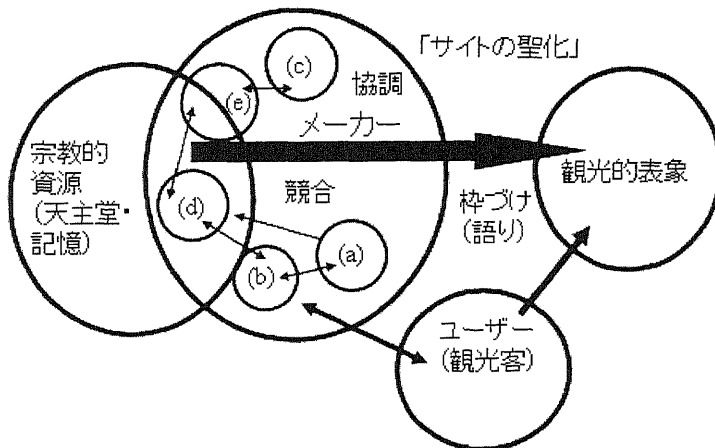


図12 宗教的資源をめぐる「メーカー」・「観光的表象」・「ユーザー」の関係図

ける「ナラティブ」ないし「物語」ということなのである。

考えてみれば、教会群の世界遺産化とは、まさに、この教会群が他の一般の教会堂とは違って人類の遺産であることを示す「枠づけ」を行なうことを要請されるということであり、いかに説得的で権威のある価値づけを与えるのかということでもある。もちろん、世界遺産という事業そのものは歴史的建造物や自然景観の保護と継承という目的をもっている。しかし、結果としてそれは観光の領域で「サイトの聖化」をもたらすわけであり、世界遺産指定が最大のマーカーとなるのも、それが他のものと異なって特別なものであることを示すからである。長崎の教会群の世界遺産としての価値づけは、長崎県と県下の自治体が共同提案した「世界遺産暫定一覧表追加資産に係わる提案書 資産名称：「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」」（以下「提案書」と略す）に詳しく記されているが、それらを観光用によりわかりやすく解説したものが『旅する長崎学6 別冊総集編』に掲載されている。それによると、教会群の価値とは、(1) 250年以上にわたって信徒たちが潜伏して信仰を守ったという世界宗教史上の奇跡、(2) 西洋と日本の技術が融合した教会、(3) いまも生き続ける信仰の場所、という三つの点に要約されている⁹⁾。「提案書」には、教会堂と自然環境の融合という意味での文化的景観も挙げられているが、基本的には、教会群の背景にあるキリシタンたちの信仰の驚嘆すべき持続力に象徴される精神性と建築物としての教会堂が備えている個性という二つの価値づけに集約されよう。これら二つのナラティブを通じて、長崎の教会群は他のものから区別される特別な建造物として「枠づけ」られ、観光的表象として観光客というユーザーの前に提供されているとみることのできるものである。実際の教会めぐりの現場では、『旅する長崎学』や『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』などが教会群のマーカーとなっており、観光客はこれらマーカーを参照しながら、教会を訪れて、その背後にある精神性と建築上の個性を納得するわけである。しかも、このナラティブは「世界遺産暫定リスト入り」という権威を背景にもっているために、教会群に関するその他のメーカーによる別のナラティブを許さないオーセンティシティをもつことになるといえよう。

ただ、ここで誤解のないように確認すれば、教会群の価値づけについてのこうした論述は、この価値づけが観光商品を作り出すために作為的に作り出された根拠のない物語にすぎないと主張しているわけではないということである。それらの評価は十分な歴史的根拠と建築学上の証拠に基づいた学術的判断を基盤にしていることは論を待たない。しかし、注意しなければならないことは、こうした価値づけと教会群とは始めから不可分に結びついているわけではなく、それがどのような価値づけを与えられるのかは、それがどのようなコンテキストにおかれるのかによって異なってくるということである。天主堂は何よりもそれぞれの地域に生活する人々のかけがいのない祈りの空間であり、それ以上でもそれ以下でもなかったはずである。天主堂が風雨に晒されて痛んでしまえば建築上の価値など考えずに修復し、その空間が狭すぎると思えば増築をしていたのである。信徒たちがそうしたのは建築の価値に無知だったからではなく、信仰というコンテキストからすれば、祈りの場としての教会の修繕にとって信徒たちの利便性が何よりも優先されたからである。しかも、天主堂が修繕によってどのようになろうとも、信徒たちのコンテキストからすれば、彼らの天主堂は依然として先祖たちの不屈な信仰の結晶であり、殉教の記憶を刻む建物に他ならなかった。M・アルヴァックスの「集合的記憶」という概念を借用すれば、天

主堂を形作っている石や煉瓦のもつ確固たる存在感は、そこに住む人々に弾圧と殉教という集合的記憶を永続させ、天主堂を中心とした集落のまとまりを確かなものにしてきたのである⁽¹⁰⁾。つまり、それぞれの天主堂は、個別的なローカルな集合的記憶を体した建造物であり、各地域に個別的に存在していた弾圧と殉教という集合的記憶を物理的に支えていたものといえるのである。こうした状況に対して、その観光的資源への展開とは、まさに先の二つのナラティブを通じてこれら教会群に「世界遺産の教会堂」という観光的表象を纏わせることで、外部の観光客たちに向けて、教会堂が訪れるに値する特別な場所であるというイメージを作り上げていくという過程なのである。そして、そうした行為は、各集落の集合的記憶の個別性を世界遺産のグランド・ナラティブの中へと一元的に吸収、再編して、もはや天主堂が当該集落固有の集合的記憶とはいえない、どんな人にとって価値にある文化遺産として再構築されることになったといえるわけである。

さて、観光的表象の「メーカー」という問題に戻れば、教会群をめぐる先の二つのナラティブが観光的表象を独占する支配的な言説だとすれば、本稿で論じる「枠づけ」をめぐる競争とはどのような事態を指しているのだろうか。そこで注目したいのが、江戸時代の長い弾圧期に耐えてキリシタンの信仰を持続したにもかかわらず、カトリックに改宗することなく、父祖以来のカクレキリシタンの信仰を維持し続けた人々の存在である。彼らの信仰は代々口承で秘密裏に伝えられてきたために、指導者の死去や高齢化、集落の過疎化などによって今日ではほとんど消滅してしまったといっても過言ではない。しかし、彼らの存在は、教会群の纏う支配的言説が言外に示すメッセージ、つまり江戸時代の潜伏キリシタンたちと今日のカトリック信徒たちとの間に信仰的な不連続は存在せず、彼らは迫害と殉教をくり抜けながら同じ信仰を一貫して堅持してきたのだという支配的メッセージを相対化し、それと競合する別のナラティブを用意する可能性をもつように思われる。すなわち、カクレキリシタンがカトリックとは異なった独自の信仰の世界を今に伝えていることは、ザビエルによって撒かれたカトリック信仰の種子が日本の風土で開花しながら、迫害の中で土着化し、キリスト教とは異なる日本独自の土着的キリスト教となったのだというナラティブの可能性を示唆するわけである。しかし、支配的メーカーによる教会群の観光的言説において、カクレキリシタンはロマン溢れる信仰の英雄として江戸時代に位置づけられなければならない、現在まで生きながらえた彼らはもはや居場所をもたない過去の亡霊として彷徨わざるをえないのである。こうした歴史の暗がりの中に置き去りにされたカクレキリシタンたちの中で、比較的最近までその組織と実践が残っていた平戸市の根獅子町は、今日展開する教会群の観光化の枠組みに組み込まれながら、迫害と殉教という自らの固有の集合的記憶を使って地域の発展を模索している。次に、根獅子町に目を転じてみよう。

(5) 根獅子町の「殉教の記憶」と表象戦略

根獅子町は、平戸島の中央部西海岸沿いに位置する戸数189戸、人口およそ750人の集落である(写真1)。町の前方には日本の海水浴場55選に選ばれた美しい白い砂浜が広がっており、かつては漁業を中心に、林業、農業も盛んな地域だった。しかし、町の人々の生活を支えていた農林水産業は次第に活力を失うようになり、昭和30年代後半から出稼ぎも始

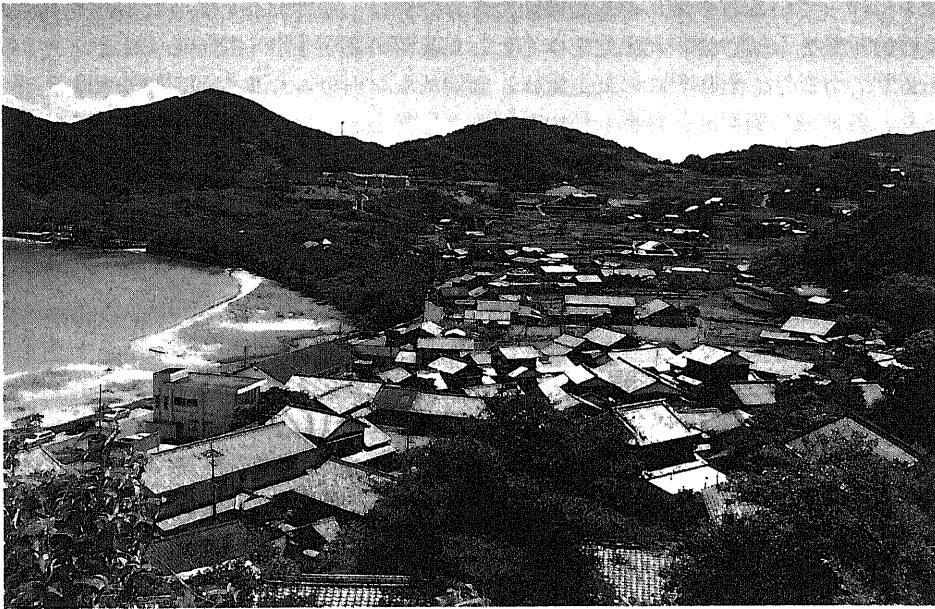


写真1 根獅子町全景

まって町に往時の活気はみられない。昭和57年、この海辺の静かな集落の一角に寄せ棟作りの平戸市切支丹資料館がオープンし、現在では「キリシタン紀行」を楽しむ観光客が訪れる場所の一つになっている。平戸城を始め平戸の観光スポットが集まる市街地から車で20分ほどかかるこの根獅子に、なぜ切支丹資料館が建設されたのだろうか。資料館のすぐ脇に広がる小さな森の入り口には「霊地おろくにんさま」と書かれた石碑が建てられ、その脇には「うしわきさま」（おろくにんさま）の由来を記した立て札がある。おろくにんさまとは、根獅子の村人を守るために殉教した6名の殉教者を指しており、この小さな森（地元では「うしゃきの森」と呼ばれている）は彼らの遺骸を密かに埋葬した場所だとされ、森のなか程には祠が祀られている。海岸には潮が引くと姿を現わす「昇天石」と呼ばれる岩があり、捕縛されたキリシタンたちはこの上で斬首され、真っ白だった根獅子の浜がその時だけは真っ赤に染まったという。いまでもこの岩を粗末に扱うことは戒められているという。資料館の脇の道をしばらく行くと、道の脇に「チチャの木」と呼ばれる大きな木が目に入る。役人から逃れて身を潜めていたキリシタン親子がそこで発見されて処刑された場所で、二人の血を吸って育った木の樹液はいまでも赤いといわれている。この木は道路改修工事の際にも切られずに残され、木を迂回して道路が延びており、現在でも不思議な因縁話が伝えられている。

殉教と厳しい監視の目をくぐり抜けながら、根獅子の人々は隠密裏にキリシタンの信仰を守ってきた。しかし、キリシタンの弾圧の嵐が過ぎ去った明治になってからも、彼らは誰一人としてカトリックに改宗することはなかった。江戸時代以来の秘密の信仰組織が村落組織と一体となっており、村人と異なった信仰をもつことはそのまま村八分を意味しており、カトリック信仰を受け入れる余地はそもそもなかった。信仰組織の頂点には「辻の

神様」と呼ばれる辻家が存在し、その下に集落の4つの単位から7人の役職者（水役）が選出され、彼らのリーダーシップのもとに父祖以来の信仰がしっかりと維持されてきたわけである。彼らの信仰実践については宮崎賢太郎の調査に詳しいが、その信仰は根獅子の人々の誕生から死に至るまでの人生儀礼の中に深く浸透していた⁽¹¹⁾。しかし、強固だったこの組織も村落内の変化によって新たな水役を捜すことが次第に困難になり、7人の水役のうち3人が欠員のまま、ついに平成4年3月に解散を決定し、ここに400年あまり続いた信仰は姿を消すことになったのである⁽¹²⁾。もっとも、彼らは江戸時代から表向きは仏教寺院の檀家であり神社の氏子であったため、解散によって町の宗教状況に特別な変化があったわけではなかった。現在、町の人々の宗派は、おおよそ曹洞宗150戸、浄土真宗30戸、創価学会3戸だという。キリスト教徒は一人もいない。このように、根獅子は、濃厚なキリシタンの記憶に満ちているにもかかわらず、カトリックの天主堂が不在な場所なのである。「子供の頃、カトリック信仰は誤った信仰だと教えられた」という地元のある人の言葉に示されるように、根獅子は殉教という独自の集合的記憶に支えられながらも、カトリックと一線を画した集落として存在してきたのである。

「辻の神様」の組織が解散して7年後の平成11年8月14日、根獅子に新たな動きが生じた。根獅子の東側に位置する紐差教会の司祭の発案で、第1回根獅子紐差小教区合同殉教祭の野外ミサがうしゃきの森に隣接する旧学校跡で開催されたのである。この殉教祭は聖母マリア被昇天祭の前夜祭を祝うとともに、おろくにんさまをはじめとした殉教者たちを祝福するもので、第一回目は町の人々も含めおよそ800名が参加した一大イベントとなった。さらに、平成14年の殉教祭には、森の裏手に「おろくにんさまに捧げるルドのマリア様」が建てられ、当時の長崎大司教によって祝別された（写真2）。いわば、根獅子の伝



写真2 「おろくにんさまに捧げるルドのマリア様」

統的宗教空間に聖母マリアというカトリックの象徴が登場し、「辻の神様」を中心としたかつての宗教空間に変化が生じたわけである。このマリア像建立の場所の選定をめぐって興味深い話を伺った。それによると、カトリックの信徒たちがマリア像の敷地として最初に望んでいたのは、根獅子の伝統的信仰に欠かせない聖水を汲む源水源だったという。聖水は、毎年大晦日の未明に水役たちが体を清め特別な衣服を身につけて源水源から小瓶で汲み取ってきた水で、一年を通じてそれを大切に保管して様々な儀式に使われた。その点からすれば、源水源は根獅子のかつての信仰の最も重要な聖所に他ならないだろう。ところが、この計画は実現しなかった。辻家がそれに反対したからである。その結果、マリア像は伝統的聖地から少し離れた現在の位置に建立されたのである。なぜ、カトリックの人々がその場所を希望したのかは明らかではないが、源水源をルルドのマリアに不可欠な洞窟の泉と類比的に重ね合わされたのかもしれない。それはともかく、源水源への聖母像の建立は根獅子の古い聖地の聖性を否定する象徴的な行為とも解釈でき、その提案の拒否はカトリックによる伝統的聖地の占有に対する古い神のささやかな抵抗と感じられなくもないのである。

さて、私はこれまで、教会群の観光資源化とは支配的なナラティブの枠づけによる観光的表象への転換のプロセスだと捉えてきた。そして、「ながさき巡礼」の創出に象徴される県の観光戦略は、その有力なナラティブとして、教会堂にキリシタン信仰の驚嘆すべき持続性を読み込んだ観光的表象を作り上げてきたとした。とすれば、メーカーとしての県観光連盟が作り出した支配的枠づけに対して、それとは異なった歴史的記憶をもつ根獅子の人々は、観光の場において、それらをどのように表象し、またメーカーの支配的言説に対して自らをどのように位置づけているのだろうか。最後のこの問題を検討して本稿を閉じたいと思う。

まず、『旅する長崎学』の根獅子の記述をみてみよう。天主堂のない根獅子に割かれたスペースはごくわずかだが、そこには昇天石とルルドの聖母を写した小さな写真が載せられており、キャプションには「マリアが見守る小さな岩[昇天石]」とある⁽¹³⁾。この写真は、支配的観光の言説空間の中での根獅子の位置づけを明瞭に示している。「マリア」というカトリックの代表的象徴が「昇天石」という根獅子のローカルな象徴を包摂し、言説空間上における聖母の圧倒的な重要性が語られている。根獅子というローカルなコンテキストからみれば、聖母は古い神の抵抗にあって根獅子の本来の聖地から退けられたといえるが、観光の支配的なナラティブのコンテキストからは、根獅子のキリシタン殉教の記憶を体現する昇天石はその優位性を奪われて聖母のまなざしの下位に立たされているわけである。

こうした支配的な表象に対して、根獅子の人々はどのように対応しているのだろうか。ここで注目したのは、先の根獅子紐差小教区合同殉教祭である。この殉教祭自体は平成11年に始まっており、ここで論じているここ数年の世界遺産がらみの観光的展開よりも少し前のものである。しかし、平戸観光協会が制作した新しい観光プロモーション・ビデオにも殉教祭は大きく取り上げられており、しかも、その演出には根獅子集落の中心者たちが積極的に介在している。こうしたことを考えあわせるならば、この宗教的イベントは「キリシタン紀行」という平戸の観光的コンテキストでの根獅子の人々が作り上げた観光的表象の提示として捉えることができるだろう。興味深いのはこの殉教祭の演出である。それ

はカトリック教会のマリア被昇天祭の前夜祭という儀式的枠を超えた極めて演劇的な演出を伴っており、ザビエルが根獅子の浜辺に降り立って布教を始めたという地元の伝承がモチーフとなっている。その演出はこうだ。夕闇の海にイルミネーションをつけた巨大な十字架を掲げた小舟が浜辺に近づいてくる。船を操っているのは松明をもった和服姿の根獅子の水役で、昇天石まで漕ぎ寄せて浜に上陸する。浜ではカトリックの司祭とともにおろくにんさまに扮した教会関係者たちが待ち受け、小舟を下りた水役はまず司祭の松明に火を点し、次いで待ち受けていた人々の松明にも次々に火が点火される。そこで祝別の祈りが捧げられ、参加者は松明を手におろくにんさまの祠があるうしゃきの森へと向かい、そこで再び祝別の祈りがあげられる。次いでルルドのマリア像で祈りが捧げられ、最後に森に隣接する運動公園（旧学校跡）で聖体拝領が行なわれる。同じステージでは根獅子の水役によるオラシヨも実演され、カトリックとカクレキリシタンの共生が演出されるのである。

観光の場におけるメーカーとしての彼らの観光表象のあり方を考える場合に、この演出からは実に様々なことが読み取れる。筋骨き自体からすれば、それは、殉教の地「根獅子の浜」を舞台にしたカクレキリシタンからカトリックへの信仰の授受をドラマティックに表現しているようにみえる。つまり、カクレキリシタンという古い信仰から正統なカトリック信仰への継承というカトリック的言説がその演出を支配しているように受け取れるのである。しかし、そうとばかりいえない要素も窺える。そもそも、この演出がザビエルの最初の上陸を根獅子だとする地元の伝承を採用したこと自体、キリシタン史を自分たちの観点から再解釈し、キリシタン史における根獅子の中心性をアピールしたといえなくもない。しかも、信仰の象徴である松明を地元の水役が最初に携さえ、浜で待つ司祭はそれを受け継ぐという演出は、キリスト教布教の歴史における根獅子の人々のイニシアティブを示す解釈になっており、そこからは苛烈な迫害の中で信仰を守ってきたという彼らの強い矜持を感じることができる。さらに、小舟が上陸する場所は彼らの殉教の記憶が凝縮している昇天石であり、松明行列が次に向かうのはうしゃきの森のおろくにんさまの祠なのである。そしていうまでもなく、イベント最後の水役によるオラシヨの実演は強く自分たちの存在の意義を訴えているように感じられる。こうしてみると、彼らの演出はカトリック的ナラティブ、つまりは教会群をめぐる観光の支配的な語りをもしろ積極的に強調することで、逆に社会的集合体としての根獅子という集落の永続性を物的に支えるおろくにんさまと昇天石を観光の場の中で意識的に焦点化しようとしているようにみえるのである。そこには、カクレキリシタンとカトリックの信仰上の連続性を強調する支配的な語りを利用しながらも、自分たち固有の記憶である「おろくにんさま」の物語を観光資源として積極的に活用し、根獅子を「カクレキリシタンの里」として活性化させようとするしたたかな計算が見え隠れするわけである。

根獅子の殉教祭の演出をこのように解釈することが可能であるとすれば、教会群の支配的な観光的表象の枠づけは、根獅子という観光の場に関与するホスト側のアクターたちによって再解釈され、その地域独自の観光表象としてリメイクされていることがわかるだろう。観光の場におけるこうしたリメイクは、もともと同じルーツをもちながらも、長い歴史過程の中で別の宗教伝統に変貌したカクレキリシタンの信仰が自らの象徴を動員しながら、支配的な宗教的象徴との駆け引き（ポリティクス）の中で自らを表出していると理解



写真3 昇天石からマリア像を望む

することもできよう。比喩的な言い方を許していただければ、カトリック信仰の象徴として「聖母マリア」を想定すれば、根獅子の伝統的信仰の象徴は「昇天石」ないし「おろくにんさま」といえよう。この二つの象徴は、根獅子での殉教祭の実施や聖母マリア像の建立場所をめぐる既に根獅子の宗教空間の中で協調、競合しているが、それが観光の場にも認められるということである(写真3)。根獅子の人々は支配的な象徴である聖母の存在を十分に認めつつも、そのもとに自らの象徴を巧みに組み入れることで、自らの存在をアピールしようとしていると捉えることもできよう。それは決して、観光の支配的言説への異議申し立てという意味での競合ではないが、教会堂をもたないながらも、長崎のキリシタン史に殉教という形で確実に足跡を留めている人々にとって、自らのアイデンティティに関わる表象戦略ともみることができるのである。そこに、カトリック的な支配的言説に対抗して、村人の殉教という根獅子固有の「場所の記憶」をめぐるポリティックスを読み取ることはそれほど穿った見方ではないように思われる。

以上のように、カトリック教会堂をキリシタン信仰の驚嘆すべき持続性の表現とみなす支配的な観光的表象に対して、その支配的な語りとは異なる記憶を有する根獅子の人々が、観光の場においてどのような表象戦略をとっているのかをみてきた。しかし、既に明らかのように、こうした表象戦略は単に観光的資源の表象の仕方の相違に関わるものではなく、根獅子の人々において根本的には「そもそも自らは一体何ものなのか」という歴史的記憶に由来するアイデンティティの問題に深く連なっているといえよう。世界遺産化を背景とした天主堂をめぐる観光の場の生成は、歴史的に抑圧された「キリシタンの記憶」を前景化させるとともに、その表象の戦略は、彼らのアイデンティティ・ポリティックスに連動しているように思われるのである。

【註】

- (1) Dean MacCannel (1976), *The Tourists: A New Theory of the Leisure Class*. New York: Schocken Books. p.43-48.
- (2) 観光資源活用トータルプラン企画提案書「新しい文化創造 “ながさき巡礼” の創設に向けて」長崎県観光連盟、p.6.
- (3) 同上、p.18.
- (4) 松井圭介 (2006)、「観光戦略としてのキリシタン—宗教とツーリズムの相克」『人文地理学研究』筑波大学大学院生命環境科学研究科、30, pp.170-173.
- (5) 『『長崎巡礼センター』設立趣意書』p.6.
- (6) MacCannel, op.cit., pp.44-48.
- (7) Ibid., pp.110-113.
- (8) 松井圭介 (2007)、「世界遺産運動にみる宗教的地域文化へのまなざし—長崎の教会群をめぐって—」、『人文地理学研究』筑波大学大学院生命環境科学研究科、31, pp.135.
- (9) 『旅する長崎学 6 キリシタン文化 別冊総集編 長崎から世界遺産を!』(2007)、長崎文献社、p.3.
- (10) M. アルヴァックス (小関藤一郎訳) (1989) 『集合的記憶』、行路社、p.172.
- (11) 宮崎賢太郎「平戸カクレキリシタンの信仰とその現状」(1998)、『平戸市史』民俗編、平戸市史編さん委員会、pp.201-232.
- (12) 川上茂次 (2004)「キリシタン秘話 おろくにんさま」平戸市まちづくり研究所。なお、以下の根獅子の記述は川上茂次氏のご教示に負うところが多い。記して感謝の意を表したい。
- (13) 『旅する長崎学 6』p.4.

(本稿は平成19年度文部科学省科学研究費基盤研究 (B)「場所をめぐる宗教的集合記憶と観光的文化資源の関係に関する宗教学的的研究」の研究成果の一部である。)

Nagasaki Catholic Church Group and Tourism

Hiroshi YAMANAKA

“Nagasaki Church Group and Christian Related Cultural Assets” was nominated as a candidate for the World Heritage Provisional List in 2007. This nomination has had a profound impact on tourism in Nagasaki. Nagasaki prefectural government, which depends heavily on tourist industry, has begun to put in serious efforts to utilize this opportunity for boosting tourist industry. First, recent developments of tourism concerning the Church Group shall be examined, and then using the results of some questionnaires conducted by our research group, social ascriptions and opinions of tourists visiting such sites shall be explained briefly. Then referring to the concept of ‘sight sacralization’ coming from Dean MacCannell, a sociologist, the process in which the Church Group, consisting of twenty catholic churches, has been being framed as a site for sightseeing shall be analyzed. Also the importance of creating some narratives to make these churches more attractive for tourists shall be pointed out. One of the significant narratives would be continuity of faith going down from the Edo era when Christians were severely persecuted to the present times. Finally a case of Neshiko in Hirado city shall be taken up. Neshiko is a place where all inhabitants, descendants of “the Hidden Christians”, have kept unique traditional folk beliefs based on indigenization of Christianity until modern times, although six people in the village in the Edo era were executed for the hidden Christians. Today, Neshiko remains non-Catholic town in spite of having six glorious Christian martyrs in the past. I’d like to examine their response to recent rapid tourism promoted by Nagasaki prefectural government: based on the narrative mentioned above, and pay attention to the way in which they try to maintain their own identity based on their own collective memory of the six martyrs.